

みんなにやさしい 北小の特別支援教育

【実践事例集No.1】



＝八日市北小の特別支援教育の理念＝

学習や対人関係に困り感をもつ子どもたちの視点に
立って指導を工夫することは、すべての子どもたちにや
さしい指導につながる。

=目 次=

1. 子どもの前では笑顔でいよう
2. ボディランゲージ(体で伝える)
3. 目からの情報を加えて話す
4. 頭の中に整理する引き出しを作る
 - 「2つお話しします」
5. 「やり方のモデルを示す」
6. 視覚情報・聴覚情報をうまく活用して集中を高める工夫
 - ことばの「間」・トーン 情報の切り替え
7. 不必要な情報を隠す
 - 隠すことで、頭の中の作業を軽減してやる。
8. ワークステーション
 - 子どもたちが、自分のペースで学習を進める学習形態の工夫
9. 授業の導入部分の工夫
 - 子どもたち全員の興味関心を集める
10. 前面掲示をシンプルに
 - 注意をそらせる不要な刺激物をなくして集中力を高める
11. 教師の話に子どもたちの意識を集中させる言葉かけ
 - 「お話聞いて」→「なあに」
 - 「静かにできるかな？3……2……1……0、シーン」
 - 「パン、パン、パン」→「パン、パン、パン」
(教師の手拍子) (子どもも真似する)
12. 指先がうまく動かない子も上手に書ける魔法の鉛筆
13. ねんどで文字練習
14. 十玉そろばんと指タイル
 - 簡単にできる繰り上がりの足し算
15. 具体的に実感する体験的な学び
 - 地面に描いた奈良の大仏

子どもの前では「笑顔」でいよう



ソーシャルスキルトレーニングの一つに、「向かい合って話す」というのがあります。

相手が何を言っても無表情で感情を殺して聞いた場合と、笑顔で相づちを打って聞いた場合で、話し手の気持ちはどう変わるかを体験するものです。

やってみると、自分の話が無表情で聞かれたら、怒りの気持ちが沸い

てきます。笑顔でうなずいてもらえると、相手との心の距離がぐんと近づきます。

教師がどんな表情で、自分たちの言葉を受け止めてくれるか、そのこと一つで教室の空気が変わります。

教室の子どもたち、とりわけ、人との関わりがうまくできない子どもたちの心を開き安心できる教室にする大前提は、教師の「笑顔」です。

ボディランゲージ(体で伝える)



「笑顔」と並んで重要なのは、教師のボディランゲージ。声だけでなく、体全体でも表現することによって、。そのことによって、教師の言葉に力が増し、子どもの体にダイレクトに届くようになります。また、子どもたちのハッする言葉を体全体で受け止めてやることで、子どもと教師の間にピンと糸が張られたような一体感が生まれます。ALTのロス先生の授業の楽しさは、ボディランゲージの豊かさにもあります。

目からの情報を加えて話す



ことばだけの説明で、具体的なイメージをつくるのはおとんでもむずかしい作業です。目からの情報も付け加えて話すことで、具体的な理解が進みます。

また、耳からの情報は、意識しないと抜け落ちます。ふっと違うことに気が向いた瞬間、耳から入ってくる教師の言葉は、ただの雑音になってしまいます。しばらくして、もう

いちど教師の話に意識をもどしても、前後の脈絡がきれてしまって、何を言っているのかわからないことが多々あります。

そんなとき、目に見える資料が前にあれば、耳からの情報を補完してくれ、理解をつなぐことができます。

頭の中に整理する引き出しを作る

「2つお話しします」



私たちは、ふだん、こんな言い方をよくします。

「ワークの〇〇頁を開いて、〇〇行目のところ、教科書にあるから、それを見ながらこっちに写して」

子どもたちは、ワークを開く、教科書を開く、教科書とワークを連動させる、それは、発達障害の子どもにはは苦手です。順番に指示が入ってくると「いったい、いつまで先生は言うんだろう」と、絶対途中で聞く気がなくなってしまうタイプの子です。

それを

「はい、前向いて。先生、3つ言うよ。」

「ワーク〇〇頁開いて」

「二番目。教科書〇〇頁開いて」

「三番目。ワークのここと教科書のここ、両方指置いて」

そして、そこから次を見させる。

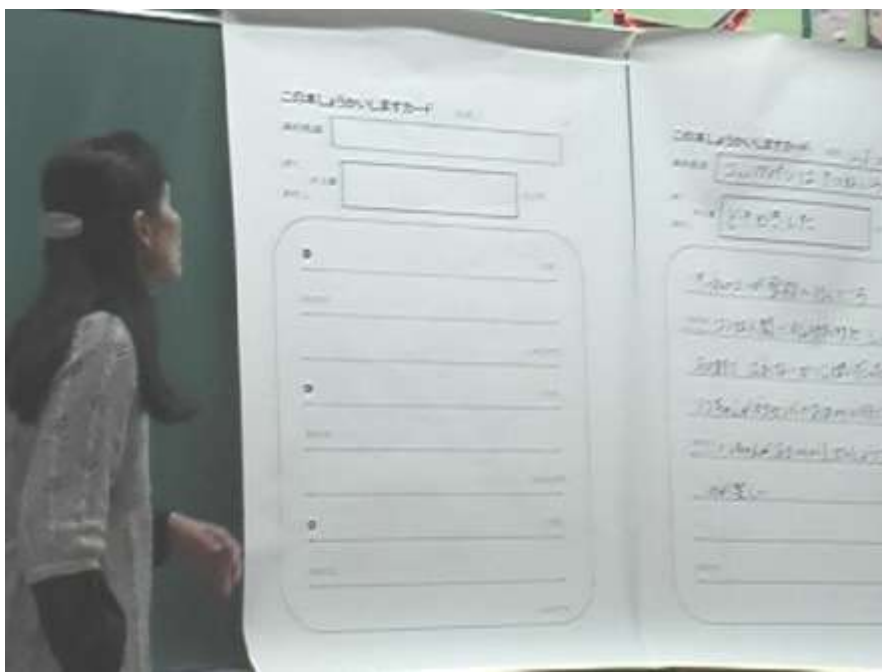
あらかじめ終わりを示してやる。「先生、三つのこと言うんやな」と。

従来私達がしていることは、頭の中で聞きながら引き出しを作って、これはこの引き出し、また話が入ってきたから別の引き出しと、同時に聞き取る作業と整理する作業をやっているわけです。

彼らは、原因は別々ですが、その部分では苦手という共通部分があります。ですから、「頭の中に三つ引き出し作りなさいよ」「一つめはこれですよ」と頭の中の活動要素を分解してやる。また、耳からだけでは苦手な子には(指三本を立てて)示してやることで目からの情報が同時に入ります。一つめは、二つめは、と指をおりながら話す。これこそ、手間もひまもかからない有効な方法です。しかも、この手法は他の子にとってもたいへんわかりやすさを高めていく手法なんだということにつながるります。

(堀居指導主事 2008.5.29)

「やり方のモデルを示す」



子どもたちのワークシートの拡大コピーを黒板に貼っています。
まず、書き方のモデルを示してやり方を説明します。
次に、教師が実際にやって見せます。
そして、子どもたちが自分のワークシートに書いていきます。

やり方を具体的に示した上で、取りかからせる。こうした丁寧な手順が、「どの子にも学びやすい学習」になっていくのです。

視覚情報・聴覚情報をうまく活用して集中を高める工夫

ことばの「間」・トーン 情報の切り替え



T はい。さあ、今日はね、実は何をするか
というと、

樹 勉強

C勉強なんだけど、今日はね……

(「こ」、「と」と一字ずつ子どもの顔を見
ながら黒板に
書いていく。
子どもたちも
読んでいく)

Cこ、と、ば

C言葉!

C言葉遊び!

T「の」

カタカナやで。「ス・ケ・ツ・チ」

Cことばのスケッチ

Tはい、そうです。今日は「ことばのスケッ
チ」をしたいと思います。

さあ、これはなーんだ?

(「トマト」の観察スケッチの絵を示す)

C(めいめい、つぶやき)

Tこれね、みんな一生けんめい書いてくれ
たでしょ。

Cうん!

Tこつうのを「スケッチ」といいます。

で、今日は、ことばでスケッチしてもらい
ます。



・声のトーン穏やかでゆ
つたり。子どもに柔らか
く入っていく

・一字ずつ書いてこども
たちに推測させる。それ
が学習への集中を生み出
している。

・トマトのスケッチ画を
出すことで「文字」とは
違う「絵」という新たな
目からの刺激。「何が始
まるんだろう」という期
待も生まれる。

今日は子どもの側にとって、言葉の情報と視覚の情報がたいへんこちよ
く入ってきている。最初の導入の時、そのことを一番強く感じました。

「言葉のスケッチ」と言われて、こんどは黒板に書かれるとき、ぐっともった
いぶって、子どもたちの視覚を引きつけるようにしておいて、また聴覚からの
刺激に入っていく。

目も使い、耳も使い、体も使い、いろんな部分を刺激しながら進めておら
れた。充実した時間でした (堀居指導主事 2008.7.2)

不必要な情報を隠す

隠すことで、頭の中の作業を軽減してやる。



一の位の筆算に注目させるために、他の部分を紙で隠す。

こういう手法は従来から学習障害の子どもへの指導法としてあった。本の上に紙をかぶせて小さな窓を開けて、他の文字を隠して読むべきところだけに注目させる。その黒板での方法と言える。

隠すというのは頭の中の作業を軽減してやるということ。

目にはいろんな情報が入ってくる。それを頭の中でいるものといらないものを選別する作業を行う。その選別作業をしながら、同時に教師の話を注目して聞くという二つ

の作業を同時に行わねばならない。その片方をなくしてやることで、頭の中の作業が単純になるということだ。

耳からの入力を受動的なのに対して目からの情報は能動的だ。見たくなければ目をつぶればよい。子どもが視覚情報に目を向けているということは意識レベルも耳からの情報よりも高い。だから比較的入りやすい。入りやすい代わりにいらぬ情報も入りやすい。そういう意味で隠すというのは非常に有効な方法だ。

(堀居指導主事 2008.9.29)

ワークステーション

子どもたちが、自分のペースで学習を進める学習形態の工夫



学習指導の中で個別指導しているシーン。前に箱が置いてあり、子どもたちは左から順番に移っていく。これは養護学校で自閉症の子どもたちに対してよくやられる「ワークステーション」という学習形態です。自分ひとりで課題をやって、課題が終わったらここに置いて、また次の課題をやっていく。あの場面で、左から右に矢印がしてあったり、箱に大きな字で「1番」「2番」……とつけるだけで、かなりの子が自分たちだけでどんどんやっていける。その分担

任の手が空くので、個別に関わってやることができる。ワークステーション的な活動を更に発展させてもらえれば、また新しい学習形態ができるのではないかな。

(堀居指導主事 2008.9.29)

授業の導入部分の工夫

子どもたち全員の興味関心を集める



授業の導入部分の5分間。ここで子どもたちを引きつけることができるか否かで、その後の学習への参加率は大きく変わってきます。

写真は、「事実と推論」の授業の導入部分。ブラックボックス(箱の中身は何だろう)というゲームをしています。全員の目が箱に集中しています。こういうゲームで全員を巻き込ん

でいくことも、集中のそれやすい子どもたちを学習に向かわせる工夫の一つになります。

前面掲示をシンプルに

注意をそらせる不要な刺激物をなくして集中力を高める



ふつう、どの教室も、前面の壁には、意匠を凝らした学級目標や当番表、日課表などの掲示物が飾られています。

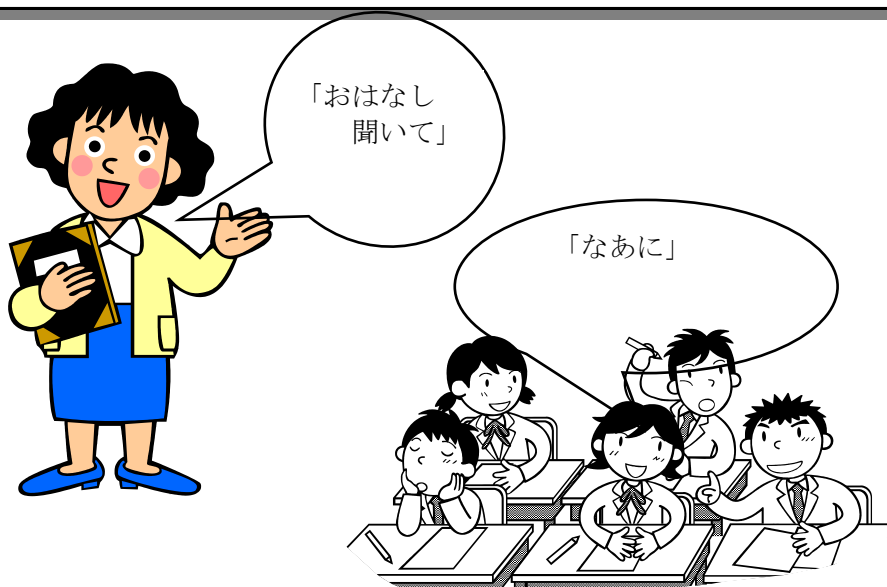
しかし、この学級は、そうしたものはすべて横か後ろの壁に掲示され、前面は最低限の掲示物だけのたいへんシンプルなものになっています。学習中、前面の壁の掲示物によって注意散漫になるのを防ごうとい配慮からです。

また、余分なものがないために、黒板の文字が一層壁くっきりと見えます。

教室環境も発達障害児の視点から見直してみると、いろいろ改善の余地がありそうです。

教師の話に子どもたちの意識を集中させる言葉かけ

- 「お話聞いて」→「なあに」
- 「静かにできるかな？3……2……1……0、シーン」
- 「パン、パン、パン」→「パン、パン、パン」→「はい……」
(教師の手拍子) (子どもも真似する)



担任の声は子どもたちに影響する。従わせることだけに集中すると、指示をする声が大きくなり、回数も多くなる。どんどん強い言い方へとエスカレートすることにもなる。刺激が重なると、学級全体が落ち着かなくなる。また、自閉傾向のある子どもは、担任の大きな声を聞くと自分が叱られていると受け取る場合もある。聴覚過敏があれば音量だけでも、問題である。大きな声を出さなければ指示に従えない場合は、クラスのルールが明示されていないか、されていても運用に一貫性がないか、まずは振り返る必要がある。

聴いていない子どもは、いつも担任から「〇〇さん、聞いていましたか？」と言われることが多い。そのことにより、その学級の子どもたちに、あの子はいつも注意されていると印象づけることになる。教師の言動がいじめにつながる可能性もある。

個人に的を絞らない注意の仕方を工夫する必要がある。クラス全員を巻き込むのも一案である。指示を出す前に、クラス中に注目させる。そのために、クラスで決めた合図を使う。例えば、「先生の声が聞こえていますか？」という形でクラス全体に問いかける。その言葉を耳にしたら、声を出さず静かに手を挙げるといった練習を日頃からしておく。

指先がうまく動かない子も上手に書ける魔法の鉛筆



指先がうまく動かないので、思うように線が書けず、ひらがな練習がに苦労していた一年生のA君。

「鉛筆が細くて、しっかりとぎれないために困っているのでは？」

と気づいた担任が、写真のような樹脂製のグリップをつけた鉛筆を使わせてみたところ、「とても書きやすい」とA君は大喜びで、文

字練習をがんばるようになり、写真右のようなしっかりした字が書けるようになっていきました。そして、学習への自信もつけていったとのことでした。

子どもの困り感に寄り添って考えたところから見つけたアイデア。こういう教師の姿勢が子どもの意欲を引き出します。

十玉そろばんと指タイル

簡単にできる繰り上がりの足し算



$$5 + 5 = 10$$

$$6 + 6 = 12$$

$$7 + 7 = 14$$



一位数の繰り上がりの足し算、繰り下がりの引き算がずらすらできるか否かは算数の学習の最初の大きなハードルです。何とか全員クリアさせたいと思います。

一位数の足し算には「タイル」を使うことが多いですが、私は、写真のような十玉そろばんがとても使いやすいと思っています。散らばらないし、操作も楽し、タイルと同じように一目で数がつかめます。

繰り上がりの足し算は、普通、10の固まりを作って計算します。でも、10の補数や数の分解

がぱっとできない子には難しく、結局、指で数え足しをしている子もいます。

指を使わないと計算できない子には、指タイルを教えてあげましょう。

グーが5の固まり。6は5の固まりとあと1個だから、グーに指一本立てる。6+6はグーとグーで10。指2本で2。合わせて12という具合です。指を使って数え足しをしている子に、このやり方を教えてやったら、うんと早く答えが出るようになりました。

具体的に実感する体験的な学び

「地面に描いた奈良の大仏」



六年生子どもたちが、社会科で奈良時代の学習をしたとき、

「奈良の大仏って、実際はどれぐらいの大きさなんだろう。実際に地面に描いてみよう。」

ということになり、資料集の写真や説明をもとに、1時間かかって運動場に描きました。

資料集をの写真だけでの学習より、うんとその大きさを実感できたでしょう。

想像すること、抽象的な思考が苦手な子にとって、こうした具体的な作業はとても有効です。